26P-pm171

就実大学における教養対話演習―「うらしま太郎」を用いた高齢者疑似体験の取り組み―

○島田　憲一[1], 谷口　律子[1], 毎熊　隆誉[1], 小野　浩重[1], 平岡　修[1], 西村　多美子[1], 塩田　澄子[1], 五味田　裕[1]（[1]就実大薬）

【目的】本学では学生に医療人としての自覚を促し，それにふさわしい態度，考え方を身につけ，また基本的なコミュニケーション能力および心構えを養うことを目的として，1 年次後期に演習形式の講義「教養対話演習」（以下演習）を行っている．演習の一環として，（社）長寿社会文化協会（以下協会）が開発した高齢者疑似体験セット「うらしま太郎」を用い高齢者疑似体験実習（以下実習）を行った．その実施方法と学生へのアンケート調査の結果について報告する．【方法】実習は 1 年生（97 名）を対象とし，全体を 3 グループに分け，1 グループにつき 1 コマ(90 分)，計 3 コマを使用して行った．「うらしま太郎」7 セットおよび体験用メガネ 10 個を使用し，1 セットに教員 1 名を配置して実施した．実習は日常生活場面を想定した「階段昇降」や「買い物」など 5 項目，薬剤師業務に関連するものとして「薬剤情報提供書内容の確認」「薬袋から薬を取り出す」など 6 項目の中から，個人用に用意したプログラムより，それぞれ 2～3 項目ずつ行った．終了後アンケート用紙を回収して学習効果を検討した．なお実習をするにあたり，本学教員 2 名が協会主催のインストラクター養成セミナーを受講し，事前に演習担当教員への伝達講習を行った．【結果および考察】アンケートの回収率は 94％（n=91）であった．学生の 84％が「高齢者に対する認識が変わった」と回答し，想像していた以上に「ものが見えない」「体の自由が利かない」等の回答が多数寄せられた．また 89％の学生が「高齢者に配慮しなければならない」「高齢者の役に立ちたい」と回答した．今回の実習は医療従事者としての心構えやコミュニケーション技術だけではなく，弱者への配慮について考える動機づけに繋がるものと考えられた．